後藤（ごとう）　守（まもる）

学位の種類	博士（教育情報学）
学位記番号	教情　第　1　号
学位授与年月日	平成20年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
最終学歴	
学位論文題目	行動空間療法の理論と実際
論文審査委員	（主査） 教授　渡部信一　　准教授　熊井正之 准教授　中島　平 教授　菅井邦明 （東北福祉大学）

＜論文内容の要旨＞

1. 研究課題

本研究で開発された行動空間療法とは、時間と空間を他者と共有する中で生起する子どもの行動を重視し、コミュニケーション活動に困難をきたしている子どもたちの行動を、構造化された場をベースにした組織化された指導者集団による応答性の高いかかわりを通して活性化させ、周囲の人や事物に対する関係力を培う小集団指導法である。

本論文では行動空間療法の体系化を進めることを最終課題とし、行動空間療法のために独自に開発した「行動空間分析法」による精度の高い分析資料をベースにして、教育臨床分野の実践にとって有効な指導法の開発を進めた。また、そのことによって、精度の高い教育情報を生み出すことを目的とした。

行動空間療法の体系化にかかわって、臨床実践研究及び理論研究をベースに、次の5つの側面から研究課題にアプローチした。

① 行動空間療法の背景：関係性を重視した母子言語関係の研究を通して、行動空間療法の対象となる子ども達のもつ関係行動の特徴を浮き彫りにする。

② 行動空間療法の体系化：行動空間療法の理論化のための基礎的な研究を通して、行動空間療法の基本的な枠組を確立する。

③ 行動空間療法のため分析法：行動空間療法による指導効果の実証的な検証のために、客観性の高い分析法を開発する。

④ 行動空間療法の実際：開発された行動空間療法による指導の実際を通してこの指導法の有効性を検証する。

⑤ 行動空間療法の展開：行動空間療法をベースにした発展的な研究を通して今後の研究の可能性を探る。

2. 論文の構成

第1部「行動空間療法の背景」は6章から構成された。ここでは、機能的構音障害、ダウン症候群、脳性まひ、自閉性発達障害、などからコミュニケーション能力に課題をもつ幼児の特性を母子言語関係の枠組を通して明らかにした。これらの知見を通して、コミュニケーション能力の育成にかかわる環境のかかわり方について考察し、行動空間療法の開発のための手がかりを得た。

第2部「行動空間療法の体系化」は4章から構成された。ここでは行動空間療法の理論化のための基礎研究を通して、行動空間療法の基本的な枠組とこの指導法の特徴である行動空間の特性について明らかにした。

第3部「行動空間療法の分析法」は3章から構成された。ここでは行動空間療法を支える分析法として、著者らが開発した行動空間分析法の信頼性と妥当性の検証を試みた。その結果、この分析法の有効性について明らかにされた。

第4部「行動空間療法の実際」は5章から構成された．ここでは行動空間療法の実際について、精神発達に遅れのある子ども、自閉的行動傾向のある子ども、対人関係に困難をきたしている子ども、多動傾向のある子ども、を対象にして、この指導法による指導を展開し、その有効性を確認した。

第5部「行動空間療法の展開」は4章から構成されている。ここでは、①行動空間療法をベースにした新たな研究として、行動空間療法の物理的場として設定している舞台空間を組み入れた「ミニチュアプレィルーム」を導入した個別指導研究、②行動空間療法の有効性の検証のために新たに開発された「ゾーン分析法」の開発研究、③行動空間療法を媒体とした高等教育機関における現職教員の力量形成を目的としたカリキュラム開発に関する研究、④行動空間療法をベースにした教育情報を保護者に提供するためのビデオ映像加工に関する研究、などの研究を通して、新たな研究分野の開拓の可能性が確認された。

以上の研究から、本研究によって体系化された行動空間療法は、コミュニケーション活動に課

題をもつ子どもたちの表出行動を質の高い関係行動として発展させ、関係力を育成させていくための有効な指導法であることが明らかにされた。

また、この行動空間療法の開発によって、精度の高い教育臨床に関する教育情報の生成の見通しが方向付けられた。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は、障害児教育領域と学校臨床領域における約30年間におよぶ子どもとのかかわりの中から得られた知見を行動空間療法として体系化させた成果であり、その内容は労作であり、世界のこの領域に新しい提案を行っており評価できる。特に高く評価できる点は次の3点である。

1点目は、コミュニケーション活動に課題を持つ子ども達（構音障害幼児、ダウン症候群幼児、脳性まひ幼児、自閉性発達障害幼児）を対象に、関係性を重視した母子言語関係の研究を通して、これらの子供達の関係行動の特徴を明らかにし、それらの知見をベースにして、行動空間療法の基本的な枠組の構築を進めているところにある。ここでは著者が独自に開発した「相互作用過程分析法」を通して、特に、「刺激の受け手としての環境のあり方」を通して、子どもの関係力についての資料の解析が進められている。

2点目は、この行動空間療法おいては、プレイルーム中央に舞台空間を設置し、舞台空間(Communicative Space）とそれを取り巻く空間（Round Space）を構造化したところにある。前者は比較的静的な場で対人関係が形成しやすい空間として押さえられている。これに対して、後者は比較的動的な場で活動の流れのなかで遊具を介在したかかわり合いが成立しやすい場として設定されている。これらの場をベースにして、チーフセラピスト、サブセラピスト、アシスタントの三者が指導の流れを形成し、関係性の高い場を構成していくことが求められている。特に、この行動空間療法において特徴的なところは、オーケストラの指揮者のような特性、灯台のような特性、港のような特性、という軸空間を併せ持つチーフセラピストの存在が大きく位置づけられている点である。行動空間療法はこのようなチーフセラピストの持つ軸空間を基点にして展開され、他のセラピストによって、Ro空間（Round Space）を渦巻き型に活動する中で、チーフセラピストのいるCo空間（Communicative Space）に収斂していく流れを作るところに特徴がある。

これらの指導の実際は、筆者らが独自に開発した「行動空間分析法」によって、5秒ごとに解析され、実証的な分析資料が作られている。このことも、これまでの心理療法とは異なる精度の高い指導記録の作成と言う点で評価されるところである。実際に、この行動空間分析法による分析結果の振り返りによって、行動空間療法の開発が支えられている。

3点目は、この行動空間療法による研究の発展として、新しい分析視点から、行動空間療法に関する教育情報を提供できる研究の見通しが方向付けられたことにある。

よって、本論文は博士(教育情報学)の学位論文として合格と認める。